



JICA保健医療ニュースレター 「保健だより」第73号

2026年5月29日発行



今号のトピック

マヒドン王子国際保健会議 (Prince Mahidol Award Conference: PMAC)

新年度が始まりました！保健だよりでは、今年度もJICAの保健分野に関する活動やグローバルヘルスを取り巻く動きについて発信をしていきますのでよろしくお願いいたします。

さて、保健だより73号では、2026年1月にタイで開催されたマヒドン王子国際保健会議(PMAC)を特集します。その他、案件終了ハイライトは、ASEANにおける災害保健医療体制の構築に貢献したARCH2、ブータンにおける遠隔医療の体制構築を通じた母子保健プロジェクト及び医学教育の質の強化プロジェクトをご紹介します。ぜひ最後までご覧ください！

目次

(保健第4チーム 足田)

- ◆ PMAC概要 1
- ◆ PMAC2026 本会合・Special Sessionからの学び 2
- ◆ PMAC2026フィールドトリップ 2
- ◆ PMAC2026サイドミーティング開催報告①②③④ 3
- ◆ PMAC2026サイドミーティング開催報告⑤ 4
- ◆ HSR2024「2025年度国際会議誘致・開催貢献賞」受賞！ 4
- ◆ カリブNCDsの予防と管理フォローアップセミナーの開催 5
- ◆ 国際母子新生児保健学会(IMNHC2026)参加報告 5
- ◆ 案件報告①ASEAN災害保健医療管理に係る地域能力強化プロジェクト 6
- ◆ 案件報告②コロナ禍を越えて紡いだ、ブータンの医学教育と遠隔医療の基盤づくり 7
 - ・医学教育の質の強化プロジェクト
 - ・遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト
- ◆ 保健グループ What's Up (2026年2月～2026年4月) 8
- ◆ ゆく人くる人 8
- ◆ 編集後記 8

今号のトピック:PMACの概要

マヒドン王子国際保健会議(Prince Mahidol Award Conference 2026、以下PMAC2026)が2026年1月26日から31日(1月26日から27日:サイドミーティング、1月28日:スペシャルセッション/フィールドトリップ、1月29日から31日:本会議)にかけてバンコクで開催されました。

PMACは、タイ国政府とマヒドン王子記念財団主催で国際保健に貢献した人材を顕彰するマヒドン王子賞授賞式に合わせて、2007年より毎年1月にバンコクで実施されている保健医療分野の国際会議です。世界各国から保健医療分野のリーダーと関係者を集め、同分野における重要課題にかかる知見・経験を共有し、解決策を模索することを目的としており、JICAは2011年以降共催として関わっています。

PMAC2026のテーマのメインテーマは、「革新的な政策を通じた世界的な人口転換への対応:公平性重視のアプローチ」であり、本会議では、3つのサブテーマ(「人口転換、社会的公平性、および人口の多様性」「人口動態の変化と医療システムの変革」「変動する地政学情勢において人と地球の健康を守る」)について議論が行われました。

期間中、JICAは4つのサイドミーティングの実施、フィールドトリップ(Site3)の共催、本会議への登壇等に貢献いたしました。PMACはアジアのグローバルヘルスネットワークの中心的位置にあり、グローバルな課題を欧米主導ではなくアジア主導で考える貴重な場です。JICAは引き続きPMACに関与し、日本の取組を効果的・効率的に発信してまいります。

(グローバルヘルスチーム 堀内)



PMAC2026 本会合・Special Sessionからの学び

PMAC2026のテーマは「人口転換」でしたが、本会合ではこれを単なる高齢化や人口減少の「問題」としてではなく、社会や制度の在り方を見直す「機会」として捉え直す視点が強調されました。出生率の回復よりも、健康寿命(HALE)をいかに延ばすかが最も効果的な対応であり、ライフコース全体を通じた保健・医療・介護・社会政策の統合が不可欠であるというメッセージは、多くの参加者の共感を集めました。とりわけ、地域や家庭を基盤としたプライマリーヘルスケア(PHC)、非感染性疾患(NCD)対策、フレイル予防、在宅医療や緩和ケアの重要性は、日本の経験が国際的にも示唆に富む事例として紹介されました。

今回特別に開催されたSpecial Sessionでは、地政学的分断やODA削減が進む中で、グローバルヘルス・ガバナンスとファイナンスをいかに再構築するかが率直に議論されました。「グローバルヘルスの黄金時代は終わった」という言葉が象徴するように、もはや理念や報告書だけでは改革は進みません。保健省だけでなく財務省や国際金融機関を含め、政治と資金の流れそのものを動かす必要があること、そして「資金量」よりも「資金の使われ方」、国の真のオーナーシップ、援助する側・される側双方の説明責任、さらに国民に対する国家の説明責任が、信頼と持続性を左右するという認識が共有されました。

PMACは、こうした厳しい現実を直視しつつ、次世代の政策と行動を生み出す対話の場であり続けようとしています。年次会議にとどまらず、PMAC Strategic Instituteという「バーチャルな機能」を通じて、アジア発信の政策提言、人材育成、実装への関与を継続的に強化していく点も、今後のPMACの大きな特徴です。JICAは2011年から共同開催者として参画していますが、今後も日本・JICAの知見の共有や人材育成、連携強化に資するプラットフォームとして、PMACに積極的に関わっていきます。

(人間開発部審議役 牧本)



PMAC2026フィールドトリップ「国際開発援助をめぐる地政学的変化と移民の健康への影響」開催報告



パネルディスカッションの様子①

本フィールドトリップは「グローバルヘルスとユニバーサルヘルスカバレッジのためのパートナーシッププロジェクト(GLO&UHC) フェーズ3」プロジェクトと、タイ国民医療保障機構(NHSO)などの共催で開催され、国際援助の縮小という地政学的変化のなかで、タイ・ミャンマー国境地域における移民・避難民の現状と、現場での対応状況について共有されました。国境付近の病院、地域診療所、行政、国際機関、NGO、市民団体が連携し保健医療サービスの継続を図る実践例が紹介され、特に、言語や文化の壁を越える有効な取り組みである移民・避難民のミャンマー人医師や保健ボランティアへの研修と現場での活用は、サービスへのアクセス改善と現場での負担軽減の両面で成果を上げています。しかしながら、移民・避難民の自立や持続可能な社会統合に向けては、就労機会の確保や医療保険へのアクセスといった課題が指摘される一方、法制度や移動制限などの構造的な障壁も依然として存在している点についても議論が及びました。

本フィールドトリップを通じ、国境地域は国内外の変化が複雑に交錯する保健課題の最前線であることが改めて示されるとともに、多様な関係者の協働による持続的かつ包摂的な対応の重要性が共有されました。

(GLO&UHCフェーズ3 上田チーフアドバイザー)



パネルディスカッションの様子②

① 人口動態の変化の時代における包摂的かつ持続可能なユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の実現

本サイドミーティングは、人口動態の変化の時代における包摂的かつ持続可能なユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の実現をテーマに、国立保健医療科学院(NIPH)とJICAが共催で開催され、NIPHの研究者や各国からのパネリストを交え、「社会的価値(Social Value)」という視点を保健医療政策にどのように組み込み、単なる医療アクセスの拡大を超えて、公平性・包摂性・信頼・持続可能性を備えた健全な社会を構築するかを議論しました。

日本及びアジア諸国(マレーシア、スリランカ、ミャンマー)におけるケーススタディのみならず、2030年以降を見据えたUHC指標や気候変動に対応するレジリエントな保健システムの構築といった幅広いテーマを扱い、参加者とのグループワークでは様々なバックグラウンドの方に参加いただき意見交換ができ盛り上がりを見せました。

(保健第4チーム 正田)

② 小児肥満対策における多分野連携と包括的保健医療システム

本セッションでは、政策・実践・学術の各分野の関係者が参加し、学童期の小児肥満を切り口として、学校給食および食育を軸とした多分野連携の可能性について議論しました。特に、連携を「いかに実践に落とし込むか」という構造的課題を取り上げて意見交換をしました。議論を通じて、Shared Incentive(共有された動機)、共通目標の設定、ならびに明確な役割分担の重要性について、参加者間で共通理解が形成されました。小児肥満は近年、世界のあらゆる地域で増加傾向にあります。この背景として注目される学校環境や都市政策、食品規制等の「健康の商業的決定要因」も含めた横断的な議論を継続していく必要性が確認されました。

なお本件は、タイ保健省からの「日本の食育・学校給食を視察したい」という要望を受けて、文科省や京都市の協力を得て視察プログラムを実施したことをきっかけに、国際会議の場での議論へと発展させた好事例でもあります。

(保健第3チーム 鎮目)



①登壇者の集合写真



②野村専門員が登壇したパネルディスカッションの様子

③ アクティブ・エイジングとイノベーションを推進するための地域横断的・分野横断的・多様なステークホルダー間の協力

本サイドミーティングは、アクティブ・エイジングとイノベーションを推進するための地域横断的・分野横断的・多様なステークホルダー間の協力をテーマに、ASEAN Centre for Active Ageing and Innovation(ACAI)、東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)、公益財団法人日本国際交流センター(JCIE)、JICAの共催で開催しました。

ASEANおよびASEAN+3諸国の政府関係者、国際機関、研究者、民間セクター、市民社会が一同に会し、アクティブ・エイジングに関する政策、技術、社会システムの革新的な実践事例を共有するとともに、今後の連携強化に向けた方向性を議論しました。

中村信太郎国際協力専門員が高齢社会対策分野におけるJICAの協力について発表を行い、セッション中に行われた参加者による投票では、JICAのコミュニティベースの協力モデルはアクティブエイジングを推進する上で最もポテンシャルがあることが示され、関心が高いことが分かりました。

(保健第4チーム 正田)

④ 誰一人取り残さない公平な保健医療システム

本セッションは、「グローバルヘルスとユニバーサルヘルスカバレッジのためのパートナーシッププロジェクト(GLO&UHC)フェーズ3」プロジェクトと、タイ国民医療保障機構(NHSO)などの共催で開催され、「人口動態の変化の中で取り残されがちな人々にいかに公平な保健医療サービスを届けるか？」をテーマに議論が行われました。タイ、日本、フィリピン、インドネシアの事例から、制度上の医療保障と実際の保健医療サービスへのアクセスの間にある課題が共有されました。これに加え、地域に根ざした支援、プライマリーヘルスケアの強化、デジタル技術の活用や多部門連携の重要性が示されました。多くの立ち見参加者が出たほど盛況となった本会合は、「誰一人取り残さない」UHC実現に向けて、実践的な知見を共有し理解を深める、有意義な機会となりました。

(GLO&UHCフェーズ3 上田チーフアドバイザー)



③発表を行う中村国際協力専門員



④戸邊専門員が登壇したパネルディスカッションの様子

⑤ 地政学的ダイナミクスの下で気候変動イニシアティブを
統合するグローバルヘルス・ガバナンスの強化

本サイドミーティングでは、気候変動が健康に与える影響と、それに対応するグローバルヘルス・ガバナンスの在り方を、地政学的変化の文脈から議論しました。気候変動は感染症分布の変化や食料・水資源の不安定化を通じ、最も脆弱な人々に深刻な影響をもたらしています。また、分断された制度や国際社会における協調の欠如が課題として示されました。災害医療のASEAN広域プロジェクト(ARCH)でも試用した日本の災害時健康危機管理サーベイランスJ-SPEEDが、災害時最小限のデータセット(MDS)としてWHOに採用された事例等を共有しました。議論を通じて、政策・技術・現場を結びつけ、包摂性と強靱性を備えた保健医療システムを構築するための国際協力の重要性が改めて認識されました。

(保健第3チーム 鎮目)



ACPHEED支援で派遣中の野崎専門家のプレゼンの様子

HSR2024「2025年度国際会議誘致・開催貢献賞」受賞！



表彰式

記念の盾

2024年11月に長崎大学とJICAが共同ホストとして長崎で共催した国際会議「第8回保健システム研究グローバルシンポジウム(HSR2024)」が日本政府観光局による「2025年度国際会議誘致・開催貢献賞」を受賞しました。

2026年2月12日に東京で表彰式が行われ、会議共催に向けて苦楽を共にして尽力した、「チーム長崎」(開催地運営委員会(LOC)メンバー)が再び集まり、喜びを分かち合いました。

保健システム研究グローバルシンポジウム(HSR)は、保健医療システムや政策について科学的かつ実践的視点から議論を行う世界最大規模の国際会議で、日本では長崎にて初開催、5日間の開催期間に110か国から1552人の参加がありました。JICAは開催地運営委員会の一員として会議の日本招致や全体企画に貢献、さらにセッションを8件主催すると共に展示ブースやミニイベントを通じてJICAの事業や取組を発信しました。長崎大学や長崎市などの関係機関の協力のもと、五島列島での遠隔医療や熱帯医学に関するスタディツアー、地元企業の出展など、地域貢献を含めた会議運営が評価されて受賞となりました。今回の受賞により、国際協力が日本社会の国際化や地域社会経済の活性化にもつながるものと再確認できました。

(参考)HSR2024開催報告は、保健だより68号参照([リンク](#))

(グローバルヘルスチーム 西村)

カリブ地域NCDsの予防と管理フォローアップセミナーの開催

カリブ地域で問題となっている非感染性疾患(NCDs)の課題を解決すべく、JICAは2024～2025年度に沖縄でカリブ国別合同研修「NCDsの予防と管理」を実施し、参加者は自国の状況に応じたアクションプランを策定しました。

今般、アクションプランの取組の後押しのため、2月18日からの3日間、研修参加者をセントルシアに集めてフォローアップセミナーを開催しました。

研修のファシリテーションは沖縄で課題別研修を受託した機関に依頼し、ホスト国であるセントルシア保健省にも協力を仰ぎました。

セミナーの内容は、アクションプラン実施状況の進捗発表、カリブ公衆衛生機関(CARPHA)による地域方針説明、セントルシア保健省の政策と一次医療施設での取り組み視察、野村専門員による生活習慣病対策のJICAの取り組み紹介、そして同じ島嶼国であるフィジー「生活習慣病対策プロジェクト」の事例を現地で活動中の専門家からリアルタイムで紹介いただきました。最終日には今後90日間で取り組む具体的な行動を策定し、汎米保健機構(PAHO)やCARPHAの助言も得てブラッシュアップしました。

参加者たちは、プラン実施の障壁となっている事項を整理し、まずは小さな一歩から始めることや、データに基づく意思決定の重要性などを学びました。普段こうしたイベントの機会が限られるセントルシア支所やカリブを主管するドミニカ共和国事務所にも多大なる協力をいただき、ナショナルスタッフのモチベーションアップにもつながったのではないかと思います。

本セミナーの実施を通じ、関係者間のネットワーク強化が図られ、各国のNCDs対策に寄与することを期待します。

(保健第2チーム 定本)



疾患別に分かれてグループワーク

参加者集合写真

関連ニュース:

[カリブ地域の非感染性疾患対策を後押し——7か国の帰国研修員が集い、フォローアップセミナーを実施 | ニュース・広報 - JICA](#)

国際母子新生児保健学会(IMNHC2026)参加報告



帰国研修員及びPJカウンターパート(ブルンジ)



帰国研修員(ソマリア)

2026年3月23日～26日にかけて、母子・新生児保健分野で最大規模の国際会議である国際母子新生児保健学会([International Maternal Newborn Health Conference 2026](#)、以下IMNHC2026)がケニア・ナイロビで開催されました。

保健セクターを巡る援助環境の大きな変化にも関わらず、前回から3年を経て開催された本会議は「Moving forward. Together.(前進しよう。共に。)」をテーマに、約80か国から研究者、政府、国際機関、開発パートナー、市民社会など多様な関係者が参加し、研究結果に基づく最新の動向と実践的な知見が共有されました。

全体会合では、一定の成果が見られる一方、各国進度は様々で、保健サービスの「質」と「公平性」に課題が残されていることが示されました。また、国別セッションでは、各国代表者が、助産師教育や医療へのアクセス改善、データを活用した政策立案など、現場に根ざした取り組みを紹介し、参加者同士が互いの取組から学び合いました。さらに、イノベーションに焦点を当てたセッションでは、デジタル技術など新しい手法を、どのように持続的に現場へ定着させるかが議論されました。

IMNHC2026の大きな成果は、「議論を行動につなげる」必要性について、参加者の共通認識が形成された点です。最終日には、新たなパートナーシップを模索しながら、会議での学びを各国・各機関が自国に持ち帰り、具体的な行動を起こすことの重要性が強調されました。アフリカや南アジアから参加した各国代表団が具体的な行動計画を立案し、「今こそが転換点」との強いメッセージを掲げ、行動へ移すことを約束しました。

IMNHC2026には、現行プロジェクト(ネパール、ブルンジ)のカウンターパートのみならず、JICAの研修に参加したことがある高官も多く参加しており、JICAが各国の保健セクターを担う中枢人材を育成してきたことを実感するとともに、心強く感じました。次回2029年の開催に向け、政府・国際機関・開発パートナー・市民社会が連携を強化しながらリソースを最大化し、エビデンスに基づく効果的な介入を行っていくことが期待されます。

(保健第4チーム 塩田)

終了案件ハイライト①「ASEAN災害保健医療管理に係る地域能力強化プロジェクト」終了報告

本事業では、ASEAN域内での緊急医療チーム(Emergency Medical Team: EMT)の円滑な派遣・受入を可能とする連携体制や制度づくり、EMT派遣調整・受援手順の整備、地域共通の標準研修カリキュラムの開発、地域連携演習の実施等を通じて、発災時に機能する災害保健医療体制の構築を支援してきました。

フェーズ1からの過去10年にわたる協力の成果として、ASEAN全体で災害保健医療管理の概念が定着し、EMT開発やWHO EMT国際認証取得、政策制度整備や人材育成が進められました。2025年3月に発生したミャンマー地震の際には、本事業を通じて構築されたEMT派遣・受入にかかる手順書やネットワークが効果的に活用され、被災者への医療活動が実施されました。その他、ASEAN災害保健医療管理研究所(AIDHM)の設立、学術ネットワークや学術活動を通じて実災害対応に係る経験と教訓がASEAN域内外の意思決定者・学者・実務者間で共有される仕組みづくり等、政策・運用・学術各面で大きく貢献しました。

特に、能力強化だけでなく地域政策制度の強化を支援し、地域政策のゴールと活動がリンクするよう案件設計が行われたこと、関連する活動やイベントを戦略的に連動させ、相乗効果を生む工夫が施されたこと、多岐に渡る関係者間の調整やロジ運営等、プロジェクト専門家やASEAN各国の在外事務所のサポートが、プロジェクトの円滑な活動実施と成果達成に大きく貢献したと感じています。

本プロジェクトはProject for Strengthening the ASEAN Regional Capacity on Disaster Health Managementの頭文字を取った「ARCH(アーチ)」として広く親しまれ、ASEAN加盟国間の相互学習と知識共創を促進しながら、日・ASEAN関係者の信頼と連携を育んできました。これまでに構築された仕組みと「顔の見える」繋がりは国境を越えて命を支える「懸け橋」となり、実災害時の対応力向上に貢献しています。今後はこれまでのARCHプロジェクトの成果をもとに、AIDHMを中心となってASEAN災害医療の取組みがさらに推進されることが期待されます。



地域協働演習で訓練シミュレーションの説明を行う様子



地域共同演習で模擬患者に診療を行う様子



第2回災害保健医療に係るASEAN学術会議(インドネシア)での集合写真

基本情報	
案件名	ASEAN災害保健医療管理に係る地域能力強化プロジェクト
協力期間	2022年1月～2026年3月
上位目標	ASEANにおいて災害に強い保健医療システムが確立される
プロジェクト目標	ASEANにおいて災害保健医療管理に係る地域能力が強化される
ODA見える化サイト	https://www.jica.go.jp/oda/project/2004724/index.html

(保健第3チーム 倉持)

終了案件ハイライト②「コロナ禍を越えて紡いだ、ブータンの医学教育と遠隔医療の基盤づくり」

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、国際協力の現場では活動が大きく制限されました。ブータンの「医学教育の質の強化プロジェクト」と「遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト」も、そうした影響を受けた案件です。「今できること」をカウンターパートと共に考え、一つずつ積み重ねていったことが、後の展開につながる基盤となりました。



医学教育：コロナ禍のR/D署名

医学教育の質の強化プロジェクトは、コロナ禍の真ただ中に始まりました。まず実施したのが、将来の活動を見据えた準備です。ブータン王立医科大学(KGUMSB)では、オンライン研修を可能とする通信環境の整備に加え、シミュレーションセンターや視聴覚室の整備が進められ、対面と遠隔を組み合わせた教育の土台が整えられていきました。併せて、動画教材作成や仮想学習環境など、その後の教育活動の基盤となる能力強化が進められました。オンライン学習プラットフォームであるOpenKGUMSBも、当初は制約下で実施可能な教育手段として導入されましたが、今では山岳地帯であるため地理的にも条件が厳しいブータンにおいて遠隔教育を支える基盤として定着しています。

準備が整えられたプロジェクト後半では、ブータン独自の救命・蘇生研修プログラム「Druk Sokchop」が体系的に整備され、インストラクター育成や全国展開に向けた土台づくりが進みました。こうして培われた蘇生技術は、ブータン国外でも生かされています。2025年に発生したミャンマー中部地震において、本プロジェクトの総括がJICA国際緊急援助隊として被災地に派遣された際、ブータンからも医療チームが派遣されており、共に開発したDruk Sokchopの知識を生かして人命救助を行いました。



↑ 医学教育：シミュレーターを使用した教員研修



→ 遠隔医療：KGUMSBにおける講義・デモンストレーション

案件情報1	
案件名	医学教育の質の強化プロジェクト
協力期間	2020年8月～2026年3月
上位目標	ブータンにおいて持続的な保健サービスが提供されるよう保健人材が供給されるための医学教育の質が向上する
プロジェクト目標	KGUMSBの医学教育の提供及び保健政策研究の能力が持続可能な形で強化される
ODA見える化サイト	https://www.jica.go.jp/oda/project/1903816/index.html

医学教育と並行して進められたのが、遠隔医療を通じた母子保健の強化です。山岳地帯が多いブータンでは、妊産婦が専門医の診療を受けるまでに長時間の移動を強いられることも少なくありません。こうした課題に対応するため、モバイル分娩監視装置(iCTG)の活用により、医師が常駐していない施設でも遠隔で専門医が胎児心拍等を評価できる体制が構築されました。

この取り組みでは、香川大学と同大学発スタートアップであるメロディ・インターナショナル株式会社が培ってきた離島・へき地医療の知見や技術が生かされています。海を隔てた香川の離島医療と、険しい山岳地帯に集落が点在するブータンでは、距離や地形によって医療アクセスが制限されるという共通の課題があり、その経験が重ね合わされています。

ブータン王妃ご本人が妊娠中にiCTGを使用したことも契機となり、母子健康手帳への記載を通じて、妊産婦健診の標準的な流れの中に組み込まれるようになっていきます。保健省が全国に導入した電子カルテシステムとのデータ連携も行われ、遠隔医療は試行段階から国家の母子保健制度の中に位置づけられる仕組みになりました。

医学教育と遠隔医療、二つのプロジェクトを通じて整えられた教育環境、機材、人材、制度は、プロジェクト終了後も次の取り組みへと引き継がれています。医学教育では草の根技術協力として新たな活動が始まり、遠隔医療では経済産業省による調査事業としてAIアプリケーション開発が進められています。コロナ禍の制約の中で始めた取り組みが、ブータンの地理的特性に合った持続性の高いモデルとして定着しつつあります。



遠隔医療：診療所の看護師と妊婦さんは「iCTGでデータを見ながら説明してもらおうととても安心します」と笑顔で話してくれました

案件情報2	
案件名	遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト
協力期間	2023年3月～2026年3月
上位目標	iCTGを活用した周産期医療サービスの質およびアクセスが向上する
プロジェクト目標	iCTGを活用した周産期医療体制が整備される

参考情報URL

遠隔医療(小規模案件のためODA見える化サイトは掲載なし)

- 第2回「JICA国際協力賞」授賞式を開催:280km車いす行進が導いた法制定、WHO推奨の医療テック、沖縄発の障害主流化。日本発の思想が世界を動かし、地域の未来を拓く力として還元 | ニュース・広報 - JICA
- 国際協力を日本の力に① ICT遠隔医療・タイでの挑戦が母子の命を救う | ニュース・広報 - JICA
- “売れない”と言われた遠隔医療で母子の命を救う | JICAについて - JICA

(保健第4チーム 戸川)

最近の保健グループ関連の動きを掲載します！

【技術協力】

<R/D締結、開始案件>

- コンゴ民主共和国・ザンビア「ウイルス性出血熱の早期探知・警戒・対応に向けたワンヘルスサーベイランス強化プロジェクト」(2026年4月26日～2031年5月1日 案件開始)
- ガーナ「デジタル技術を活用した保健システム強化アドバイザー」(2026年4月27日～案件開始)
- エクアドル「リーシュマニア症およびシャーガス病の感染・病態リスク評価システム開発プロジェクト」(SATREPS)(2026年7月1日～2031年6月30日 R/D締結)

<終了案件>

- タイ「ASEAN災害保健医療管理に係る地域能力強化プロジェクト (ARCH2)」(2022年1月～2026年3月 案件終了)
- ブータン「医学教育の質の強化プロジェクト」(2020年8月3日～2026年3月31日 案件終了)
- ブータン「遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト」(2023年3月6日～2026年3月5日 案件終了)
- ニカラグア「乳がん早期発見アドバイザー」(個別専門家) (2024年2月15日～2026年2月13日 案件終了)
- グアテマラ「プライマリ・ヘルス・ケアを通じた母子栄養改善プロジェクト」(2022年1月25日～2026年3月5日 案件終了)
- セネガル「コミュニティ健康保険制度強化プロジェクト(Dooleel CMU フェーズ2)」(2022年4月5日～2026年4月4日 案件終了)

【国際会議など】

- マヒドン王子国際保健会議(Prince Mahidol Award Conference 2026)1月26日～31日@バンコク
- 国際母子新生児保健学会(International Maternal Newborn Health Conference 2026) 3月23日～26日@ナイロビ
- カリブ地域合同国別研修「非感染性疾患(NCDs)の予防と管理」に関するフォローアップセミナー 2月18日～20日@セントルシア
- 世銀/IMF春季会合4月14日～16日@ワシントンD.C.



ゆくひと くるひと



グローバルヘルスチーム堀内です。1年間保健だよりの編集・発行に携わらせていただきました。その中で、改めてJICAの保健事業について考える機会となり、自分の勉強にも繋がりました。このような機会をいただきまして感謝申し上げます。今後も他のメンバーが様々な情報を発信していきますので、引き続き保健だよりをどうぞよろしくお願いいたします。

(グローバルヘルスチーム 堀内)

約2年間、保健だよりの編集・発刊に携わらせていただきました。変化していく国際社会の動向の中で、JICAの活動をどう発信していけば身近に感じていただけるのか、試行錯誤する中で多く学ばせていただきました。執筆にあたっては多くの関係者の皆様にご協力いただき、誠にありがとうございました。今後も「保健だより」は様々なニュースをわかりやすく発信していきますので、引き続きよろしくお願いいたします！

(保健第2チーム 岸野)

編集後記

保健だより73号をご覧いただき、ありがとうございました。いかがでしたでしょうか？本号では、バンコクで開催された「マヒドン王子国際保健会議(PMAC)」、ナイロビで行われた「国際母子新生児保健学会(IMNHC)」、そして長崎で開かれた「保健システム研究グローバルシンポジウム(HSR)」と様々な保健分野の国際会議を取り上げご紹介しました。国際会議は、世界の最新動向を知ると共に、共創パートナーと繋がり、対話し、連携を強化する貴重な機会であり、開発効果を最大化するためにも非常に重要な場となっています。JICAの取組についてもこのような場を通して、引き続き世界に発信してまいります！2026年度も、JICAの保健分野の協力の成果を皆さまに分かりやすくお伝えできるよう、保健だよりにて発信を続けていきます。次号の保健だよりもお楽しみに♪

(保健第4チーム 塩田)



保健だよりで取り上げてほしい特集テーマを募集します！

人間開発部 kadaishien-ningen@jica.go.jp

までお寄せください！

ご意見ご感想もお待ちしております！